



みのる法律事務所便り  
第 2 7 2 号  
平成 2 4 年 1 2 月

みのる法律事務所  
弁護士 千田 實

〒 021-0853

岩手県一関市字相去 57 番地 5

TEL : 0191-23-8960

FAX : 0191-23-8950



みのる法律事務所 <http://www.minoru-law.com/> [✉ minoru@minoru-law.com](mailto:minoru@minoru-law.com)

## 感 謝



### ○ 普通に生活できていることに感謝

朝、ウォーキングをしていたら、「ありがたい」という言葉が口から飛び出してきました。腎移植後、ウォーキングを再開してしばらく経ちました。スイスイと歩いて爽快です。いつものように気持ちよく歩いていたところ、突然「ありがたい」という言葉が口から飛び出してきました。

「何ありがたいのだろうか」、「誰に対してありがたいのだろうか」と、歩きながら考えてみました。「ありがたい」と思うことは、いろいろあります。この1年を振り返ってみて、特に「ありがたい」と思うことを、思いつくまま拾い上げてみました。

何ありがたいと言っても、「普通に生活できていることがありがたい」と気づきました。そこで、一番最初に「普通に生活できていることに感謝」という言葉になりました。

昨年（平成23年）12月12日、東京女子医科大学病院（東京都新宿区）において直腸癌摘出手術と人工肛門造設手術を受けました。今年（平成24年）4月2日に、人工肛門閉鎖手術を受けました。4月4日に、第1回目の慢性硬膜下血腫除去手術を受けました。4月28日に、第2回目の慢性硬膜下血腫除去手術

黄色い本、いなべんの本は、有限会社エムジェエムの他、下記書店でも好評発売中です。

宮脇書店気仙沼本郷店 〒988-0042 気仙沼市本郷 7-8 TEL: 0226-21-4800  
[amazon.co.jp](http://www.amazon.co.jp/) <http://www.amazon.co.jp/> ~送料無料~

を受けました。6月1日に、第3回目の慢性硬膜下血腫除去手術を受けました。6月28日に、腎移植手術を受けました。

どの手術もうまく行きました。7月18日には退院し、こうして無事年末を迎えることができました。退院後、体調はすこぶる良く、30年振りに健常者に戻った感じです。

これは、手術を担当してくれた医師の先生方を始め、30年の間にいろいろな治療を下さった先生方、看護師さん、栄養士さん、その他医療関係者の皆様のお陰であることは言うまでもありません。のみならず、ここまで医療を進歩させて下さった先人のお陰でもあります。それら医療関係者の皆様に対し、感謝申し上げます。

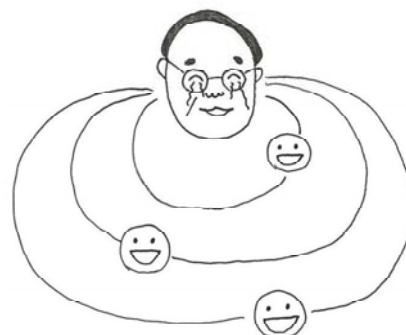
## ○ 経済的負担がなく、治療を受けられたことに感謝

人工透析療法を受けると1か月約50万円、年間約600万円の医療費がかかるそうです。生体腎移植手術を受けるためには、約400～500万円の医療費がかかるということです。

ですが、私は人工透析療法に入ることによって一級身体障害者と認定されました。その恩恵を受け、人工透析療法においては1か月2万円だけが自己負担となり、その余はいろいろな制度によって救済してもらいました。生体腎移植手術の費用は、私の分も妻の分もほとんど自己負担分はありませんでした。人工透析療法を受けている時も、腎移植手術を受け、入院している時はもちろん、その前後もほとんど働けませんでしたので、医療費の負担がほとんどなかったことは大変ありがたいことでした。

多額の医療費はどこから出たかということですが、これは国民の皆様が保険料だとか税金だとかで出したお金が使われたことは間違いありません。

多額な私の医療費を、国民の皆様にご負担いただいたこととなります。国民の皆様に対し、感謝申し上げます。





## ○ この事務所便りを出し続けられたことに感謝

ここ1年間、前記のように入退院を繰り返しました。それにもかかわらず、この事務所便りは1回も休むことなく、発行し続けることができました。「ありがたい」という思いが湧いてきました。

この事務所便りは、平成2年（1990年）5月から毎月1回発行してきましたが、今回で第272号となりました。この間、一度も休むことはありませんでした。つまり、22年8か月、一度も休むことなく発行し続けたということになります。続けられたことが、ありがたいことです。特に、この1年間は入退院を繰り返していましたので、出し続けられたことに對し、感無量なものがあります。ただただ「ありがたい」という思いです。

なぜ発行し続けられたかを考えてみますと、第一にこの事務所便りをお読み下さっている皆様のお陰であるということ、改めて確信することができました。事務所便りをお読み下さっている皆様の多くの方が、いつも事務所便りに對するご感想をお寄せ下さったり、話題にして下さったりしています。そのことは、これまで書き続けられたエネルギーの源です。この事務所便りをお読み下さっている皆様に対し、感謝申し上げます。

この事務所便りを発行することを支えてくれた事務局に対しても、「ありがたい」という気持ちが湧いてきます。毎月原稿書きを手伝ってくれた上、多くの部数を発送したり、結構手間暇のかかる仕事を落ち度なくこなしてくれていることをありがたいと感じています。特に、ここ1年間は入院などのため、私が事務所を留守にすることが多かったのですが、その間も休むことなくこの事務所便りを出し続けられたことは、事務局の力によるものであることは間違いありません。事務局に対し、感謝申し上げます。

100冊!



## ○ 5冊の本を出版できたことに感謝

この1年間で5冊の本を出版することができました。①『法律事務所の事務員が答えた本 ～遺産を残す方のために～』（発行所 有限会社エムジェエム、平

成24年2月20日発行、略称「ピンクの本」、②『食事療法を詠む』（前同、5月30日発行）、③『患者とその妻の腎臓病体験記 ダイジェスト版』（前同、9月28日発行）、④『患者とその妻の腎臓病体験記 第1巻 大事なことを知らなかった』（前同、11月29日発行）、⑤『実務民事訴訟講座（第3期）』（発行所 株式会社日本評論社、発刊時期未定）の5冊です。

⑤の『実務民事訴訟講座（第3期）』は、法律学、経済学、自然科学関連の書籍を数多く発刊している株式会社日本評論社において、実務家の間では定評のある「実務民事訴訟講座シリーズ」の最新版です。私にも執筆依頼があり、「光栄なことだ」と引き受けましたが、締切が今年（平成24年）1月初旬でした。入院中でしたが、事務局の手を借り、締切に間に合わせることができました。私の執筆分の校正作業はすでに終わっていますが、各分野の第一線の執筆者が論文を寄稿する共著形式の本であるため、現在出版社において編集作業が進められているとのことでした。来年辺りには発刊されるのではないかと思います。発刊されましたら、この事務所便りにおいてご紹介させていただくつもりです。

1冊の本を出すことは、そう容易いことではありません。結構手間暇がかかります。正直に申しますと、金もかかります。本を出版して金が儲かるということは、われわれ如き名もない者には至難の業です。

それにもかかわらず、入退院を繰り返したこの1年間において5冊の本を出版できたということは、ありがたいことだと思います。

これは、私如きが書いた駄文でも目を通してくれる方がおられるからです。まず、この事務所便りをお読み下さっている皆様がその代表者です。黄色い本は、同病者やその家族や医師や看護師さんや栄養士さんなど、医療関係者の方々が読んでくれています。この事務所便りをお読み下さっている皆様や医療関係者の皆様に対し、感謝申し上げます。

特に、この1年は私の体調から言えば本など1冊も出版できる状況ではありませんでしたが、事務局が補ってくれました。ここでも、私の出版を一から十まで手伝ってくれた事務局に対し、感謝申し上げます。





## ○ 事務所を開き続けられたことに感謝

ここ1年は、前記の通り入退院を繰り返していましたが、そのために事務所を休みにしたということは1日でもありませんでした。私が入院中でも事務所は開いていました。このことは、関係者の皆様に多くのご迷惑をおかけした上で出来たことであり、誠に申し訳なく思っています。そんなことをお許し下さり、本当にありがたいことだと思えます。今になって、そのありがたさが深く染み込んできています。

こんなことができたのは、クライアント（依頼者）の皆様のお陰です。私が入院中であることをわかっているにもかかわらず、事務局と打ち合わせをして、事件の処理を進めてくれる方がほとんどでした。「本当にありがたい」という気持ちで一杯です。

裁判所も検察庁も相手方の弁護士先生も、期日の変更によく応じてくれました。期日変更が難しい事件においては、多くの弁護士先生が私の代わりに法廷に立ってくれました。これらの皆様に対し、「ありがたい」という思いが湧いてきます。

私が入院で留守の間を守ってくれた事務局に対し、「よくやった」という思いと、「ありがたい」という思いが湧いてきます。普段厳しく注文をつけて参りましたが、それを素直に聞き入れ、私が弁護士になって4～5年経った頃以上の力をつけたと思われるほどまで成長してくれた事務局に対し、ありがたいという思いです。

クライアントの皆様、裁判所、検察庁、弁護士の皆様、そして事務局に対し、感謝申し上げます。



## ○ 家族がいることに感謝

私が人工透析に入ったのは、昨年（平成23年）3月30日でした。初孫が生まれたのは2月1日です。東日本大震災・三陸巨大津波は3月11日でした。日本にとっても激動の時期でしたが、私にとっても激動の時期でした。生まれて間もない孫も、私と一緒に激動の時期を過ごしました。

昨年2月15日に宮城県大崎市の医療法人永仁会・永仁会病院（理事長・宮下

英士先生) においてシャント造設手術を受けるため同病院に入院しましたが、生まれて間もない孫は、その後ずっと母や祖母と一緒に病院に来ていました。孫を見るたびに、病気を忘れ、明るい気持ちになりました。その孫も、最近「ジッチ大好き」などと言ってくれるようになりました。

東京女子医科大学病院に入院中は、東京にいる長男、二男、娘婿が代わる代わる見舞いに来てくれました。一緒に病室に寝泊まりし、一晩中汗を拭いてくれたり、食事の世話から下の世話までしながら、看病をしてくれました。車椅子も押してくれました。私が眠れない時は、人生を語り合いました。家族がいることのありがたさを改めて知らされました。

兄や弟には毎日のように電話をもらい、励まされました。兄からの朝の電話で入院生活の一日が始まるという状態でした。兄も私が腎移植で入院中、心臓の手術で入院していましたので、互いにベッドの中から電話で励まし合いました。兄弟がいることのありがたさも知らされました。親の遺産を巡って、骨肉相食<sup>あいは</sup>む争いをしている兄弟が多くいることを知っている身としては、この年まで兄弟仲良く暮らせていることを、「ありがたい」としみじみ思いました。

これら家族や兄弟に対し、感謝しています。



## ○ 妻と一心同体になれたことに感謝

平成24年(2012年)6月28日、東京女子医科大学病院において妻の腎臓をもらい、腎移植手術を受けました。手術の結果も経過も順調です。これで、文字通り私達夫婦は「一心同体」になれました。

お陰様で、30年振りに健常者と変わらぬ状態になれました。ほとんど普通の生活ができています。それがどれほどありがたいことかということは、筆舌に尽くしがたいものがあります。1か月に1回、東京女子医科大学病院で血液検査を受け、免疫抑制剤の調合をしてもらい、その薬を飲むだけです。免疫抑制剤と言っても、普通の薬と何ら変わるところがなく、朝と夜に飲むだけです。特別な負担はありません。

このような健常者と変わらぬ健康状態になれたのは、妻が早い時期から腎臓の提供を申し出てくれたこと、妻が積極的に腎移植手術を推し進めてくれたこと、私の右下腹部に埋め込まれている妻の腎臓がフル稼働してくれているからです。その腎臓に対し、妻に対し、感謝しています。

このように拾い上げてみますと、感謝したいことばかりであり、感謝したい人ばかりです。平成24年（2012年）の年末を迎え、この1年間ほど感謝の心が強く湧いてきたことは、過去70年間の人生においてなかった気がします。それほど、ありがたい1年でした。

感謝とは、「ありがたいと感じること。また、ありがたいと感じて礼を述べること」と角川必携国語辞典には記されていますが、まさに「ありがたい」と感じ、「礼を述べたい」と思う年末になりました。

**本当に、本当にありがとうございました。**

孫が1歳10か月になり、テレビの子供番組に夢中です。「ジッチもいっしょ♥」と、手を引っ張ってテレビの前に座らされます。子供向けの歌が圧倒的に多いのですが、子供向けの歌の中にも、人生を教えられるような内容のものも少なくありません。その中で、「ありがとうって、嬉しいなあ」という一句がありました。この1年間を振り返って、「感謝」とか「ありがとう」と書けていることは、本当に嬉しいことです。

1年間を振り返り、こんな嬉しい思いを書けている平成24年（2012年）は、「私の70年の人生において、最も素晴らしい1年間だった」と心の底から思うことができます。これも皆様のおかげです。

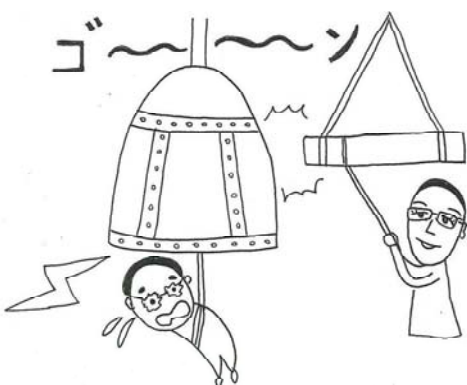
**感謝、感謝です。**

ありがたや あゝ ありがたや ありがたや

なんところまで やらせてもらえ

平成24年12月23日

あおぞらうきよのすて  
青空浮世乃捨





## 『腎臓病体験記』を<sup>わ</sup>読んで<sup>け</sup>もらいたい理由

### ○ 13冊目

『患者とその妻の腎臓病体験記』の完全版の第1巻『大事なことを知らなかった』が発行されました。発行所は有限会社エムジェエム、印刷は三陸印刷株式会社さん、販売元は宮脇書店気仙沼本郷店さん、著者は私と家内、イラストは遠藤隆行先生です。このスタッフで糖尿病、高血圧症、慢性腎不全症に関する本を発行するのは、これで13冊目になりました。いずれも表紙が黄色なので、「黄色い本」と呼んでいます。

こんなことは、この事務所便りをお読みいただいている皆様にご承知のことであり、今さら改めて述べるようなことではありません。ですが最近、この「黄色い本シリーズ」をお読みいただく方が増えて参りましたので、その方々のために、アウトラインを紹介させていただくことにします。

### ○ 感無量

先日、九州のある市の健康課から、「これまで発行した黄色い本全部を購入したい。市民の健康管理に活用させていただきたい」との購買申込書を頂戴しました。大変嬉しい出来事です。読んでいただいた上、「市民の健康管理に活用させていただきたい」という市が出現したことについては、望外、つまり、望んでいた以上に嬉しいことです。

私達スタッフが、黄色い本を発行し続けてきたのは、「一人でも多くの方の健康管理に活用してもらいたい」と考えているからです。市を挙げて、黄色い本をお読みいただいた上、「市民の健康管理に活用する」とのお話は、私にとっては、涙が出るほど嬉しいことなのです。そのように活用してもらえたらと思い、書き続けてきました。スタッフにとっても、オーバーな言い方になりますが、昇天するほど嬉しいことなのです。感無量です。

### ○ お役に立った

私はこれまで、約50冊の本を書いてきました。いつも「こんな本を書いても読んでくれる人がいるのだろうか」という思いを持ちながら書いています。それだけに、自分の書いた本を読んでもらい、感想などをお寄せいただいたりした時は、本当に嬉しくなります。特に「黄色い本シリーズ」は、健康管理や命に関わる内容ですから、その本が誰かのお役に立っているということを知った時は、「書



いておいて良かった」と心の底から思います。

先日、腎臓病体験記の『ダイジェスト版』を発行したところ、お読み下さった方の中から数名の方が、「ダイジェスト版を読んで、生体腎移植を受けることにした」という連絡をわざわざ寄せてくれました。このことを聞いて、嬉しくて仕方ありませんでした。『腎臓病体験記』は、それを聞いただけで、「書く決心をして良かった」と、家内と握手を交わしながら喜び合いました。読んでもらって、活用していただくことが、何よりも嬉しいのです。

## ○ 活用してもらいたい

私もスタッフも、「本を書いて金を儲けよう」などという考え方は全くありません。幸い、私には弁護士という本業があり、その本業でなんとか生活はできていますので、本で稼がなければならないという立場にはありません。本を書く目的は、これまで多くの方に支えられて生きてきましたので、少しでも恩を返せないだろうかと考えた結果、「自分が体験したことで、人の役に立つことがあったら読んで活用してもらいたい」という思いから、本の発行を思いついたものです。その考え方は、約50冊の本を発行した現在も変わっていません。スタッフも全く同じ考え方です。

特別、人より貴重な体験をしたというものではないのですが、「私が体験を通して思うところを嘘、偽りなく素直に書いて、それを読んでもらい、活用できる場所があれば活用してもらいたい」という思いだけです。どの本も、そのような思いで書いています。その意に賛同して下さっているスタッフがそれを支え、ここまで発行し続けてくれているのです。

## ○ 謹呈

『腎臓病体験記』も、そのような流れの中でスタートしました。平成24年（2012年）9月28日に『ダイジェスト版』を発行し、今回、11月29日に完全版の第1巻『大事なことを知らなかった』を発行する運びとなりました。この第1巻は、まだどこにも出回ってはいません。まず、この事務所便りをお読み下さっている皆様に読んでいただきたいのです。この事務所便りと一緒に、1冊同封させていただきます。私と家内より謹呈させていただくものです。

私達は、『腎臓病体験記』は、私達にとって大事な人に是非お読みいただきたいのです。その理由は、私達の大事な方には、私が体験したような辛い思いをしてもらいたくないからです。私達にとって大事な人には、特にいつまでも元気で、活躍してもらいたいからです。

## ○ 目玉

『腎臓病体験記』は、相当長い本になると思います。全巻で数冊になることは間違いありません。時には、私達の死生観に及ぶこともあると思います。それだ





けに、まとまりのない<sup>さんまん</sup>散漫なものとなる心配もあります。取り留めがないものとなりそうな気がします。

そんな『腎臓病体験記』ですが、二つの目玉があると思います。一つは、「慢性病は予防し、進行を食い止めなければならない」という点です。つまり、食事療法を中心とした生活習慣の改善によって、慢性病を予防し、慢性病の進行を食い止めるということが、このシリーズの一つ目の目玉です。もう一つの目玉は、「慢性病が進行し、慢性腎不全となり、透析療法に入らなければならないという段階に入ったら、できるだけ早いうちに生体腎移植手術を受けた方がよい」という点が二つ目の目玉です。

### ○ 第3、4巻

「生活習慣の改善によって慢性病を予防し、慢性病の進行を食い止める」という目玉と、「透析療法に入らなければならないという状況になったら、生体腎移植を受ける」という目玉が、『腎臓病体験記』の最も肝心なところであり、この二つの目玉こそ、一人でも多くの方に知っていただきたいものです。その目玉を、できるだけ正確に知ってもらいたく、目玉だけではなく、目玉の周囲も書こうと考えています。

二つの目玉をより良く理解してもらうためには、第1巻の『大事なことを知らなかった』、第2巻の『こんな症状が出た』を読んでおいていただきたいのです。そこには、糖尿病、高血圧症、脂質異常症、慢性腎不全などの基礎知識と、出現する症状が書かれています。そのような予備知識を持った上で、『腎臓病体験記』の二つの目玉である第3巻『薬と食事』と第4巻『透析と腎移植』を読んでいただきたいのです。

第1巻、第2巻を読んでいただいた上で、第3巻、第4巻を読んでいただくと、目玉の部分がより良くご理解いただけるものと思います。

### ○ 薬と食事

第3巻の『薬と食事』においては、薬と食事で慢性病の治療を続けることの大事さを強調するつもりです。薬と食事で治療を続けることは、それほど大きな負担は伴いません。ですから、薬と食事だけで治療を続けている間は、QOL（生活の質）は、それほど低下することはありません。QOLの向上と保持こそ、治療の本当の目的ではないでしょうか。「治療は、命を救済することが目的だ」と考える方もおられるかもしれませんが、よくよく考えると、「命を救済する」などということは、どのように医療が進歩しようとするものではありません。誰だって、いつかは死ぬのです。治療の真の目的は、QOLの向上と保持ではないでしょうか。

そう考えると、薬と食事で慢性病の治療を続けている間は、QOLがあまり下がりにませんので、この時期を1日でも長く続けることが大事であるということが





理解できます。それこそ、治療の真の目的ではないでしょうか。

この時期をいかに延ばすことができるかということ、第3巻の『薬と食事』において、患者を体験した身として述べてみたいと考えています。

## ○ 透析と腎移植

しかし、「薬と食事では対応しきれなくなり、透析導入をせざるを得ないという段階に至ったら、生体腎移植を速やかになすべきだ」というのが、第4巻の『透析と腎移植』で述べたいことです。

透析導入患者が年々増えており、すでに30万人を超えたとと言われております。これから透析患者はもっと増えるかもしれないという状況となっていると言っても過言ではないと思います。「透析患者をこれ以上増やしたくない」というのが私の願いの一つです。

人工透析は、一般に週3回、1回4時間位です。これだけの時間をとられてしまいますと、かなり行動が制限されます。病院への行き帰りの時間や、透析前の準備や透析後の始末の時間まで入れますと、さらに多くの時間が人工透析のためにとられます。それだけ生活が制約されることになることは否定できません。つまり、それだけQOLが低下することになります。「透析でQOLを上げる」というドクターもおりますが、時間が制約されるという点だけみても、透析はQOLを向上させたり、保持させたりするものとは言いにくいと思います。

人工透析において、一人当たり年間約600万円の医療費がかかるということは、30万人では1兆8,000億円ものお金がかかることになります。そのほとんどは税金が使われることになります。この観点からも、人工透析患者をこれ以上増やすことは抑えなければならないと思います。

## ○ 情報提供

どのような病気が元で透析に入ることになったのか等、いろいろな要素がありますが、私の場合は、人工透析に入って1年位した頃から、QOLは目に見えて低下しました。「これでは、もう仕事も日常生活もできそうにない」というギリギリのところ、生体腎移植手術を受けました。その結果、健常者と変わらぬ状態に戻りました。QOLは、30年前に戻ったという感じです。

この本の目玉の二つ目は、「透析に入らなければならないという状態に陥ったら、一日も早く生体腎移植手術を受けるべきだ」ということです。

第4巻の『透析と腎移植』においては、人工透析のメリットとデメリット及び、生体腎移植手術が身近な療法であり、根本療法であることを体験に基づいて書つもりです。生体腎移植についての情報を、患者として体験した範囲で知らせたいと考えています。腎移植を受けた後、何人かの弁護士から、「血液型が違って腎移植はできるのか」という質問を受けました。私はA型、家内はB型ですが、腎移植は受けられました。「手術費用は2,000万円位かかるのではないか」



という質問をされた方も何人かおられました。しかし、私達の場合、医療費はほとんどかかりませんでした。相当の知識人であっても、生体腎移植に対する正確な知識をお持ちになっていないということを知られました。第4巻『透析と腎移植』においては、このような基礎的知識についても、患者として体験し、知った範囲に限りませんが、述べてみたいと考えています。

## ○ QOLの保持

九州のある市の取り組みは、一つ目の目玉である「生活習慣を改善して慢性病の予防ないし進行を食い止める」という活動に『腎臓病体験記』を活用されようとするものであり、私やスタッフの意を十二分に酌み取っていただけのものであり、ありがたいことです。また、『腎臓病体験記』を読んで、「透析中だが、生体腎移植を受けることにした」というご連絡は、「透析を導入しなければならない状態に陥ったら、生体腎移植をなすべきだ」という二つ目の目玉を酌み取っていただけのもので、これまたありがたいことです。

私が皆様に『腎臓病体験記』を読んでもらいたいという理由は、これまで述べた二つの目玉をご理解いただき、「薬と食事によって、1日も長くQOLを保持していただきたい」ということと、「万が一、透析導入をしなければならないという状況に陥ったら、生体腎移植をしてQOLを戻してもらいたい」という思いからです。

## ○ 多くの人に読んでもらいたい

そのような思いから、私にとって大事な方には、『腎臓病体験記』を是非読んでいただきたいのです。そのような願いを込めて、今回発行の運びとなった腎臓病体験記・第1巻『大事なことを知らなかった』を、まずこの事務所便りを読んでいる皆様に、私と家内から謹呈させていただくことにしました。

私も家内もスタッフも、前にも述べましたが、「本を売って稼ごう」という考えはありません。黄色い本シリーズは、特にそのような思いが強い本です。私達の体験を参考にしてほしいのです。そして、少しでも長くQOLを保持していただきたいのです。

私も家内もスタッフも、「一人でも多くの人に、この本を読んでもらいたい」という気持ちで一杯なのです。そのためには、まずこの本の存在を知っていただき、共鳴して下さる方がおられましたら、他の人に広めていただきたいのです。1個の石を池に投げ入れた時、水面に広がる波の模様のように、広まってほしいのです。皆様に謹呈させていただくこの本1冊が、池に投げ入れた1個の石になってほしいのです。

この本を読んでもらいたい理由は、そういうことなのです。

